



Dynamic English

ダイナミック・イングリッシュ

SOCIETY & VALUES



米国国務省 2007年8月
第12巻 第8号

米国国務省国際情報プログラム局

コーディネーター	Jeremy F. Curtin
編集責任者	Jonathan A. Margolis
クリエイティブ・ディレクター	George Clack
総編集長	Richard W. Huckaby
編集長	Robin L. Yeager
制作部長	Christian Larson
副制作部長	Sylvia Scott
ウェブ制作	Janine Perry
編集アシスタント	Chandley McDonald
コピーエディター	Rosalie Targonski
写真編集	Ann Monroe Jacobs
参考資料担当	Martin J. Manning
著作権担当	Connie Faunce
表紙デザイン	Bryan Kestel

編集部は、市販の製品の画像を含む各種の画像やビデオの提供に深く感謝している。使用させていただいた画像の製品を、米国国務省が推薦するものではない。

本号のタイトル「ダイナミック・イングリッシュ」は、近代米国英語の変遷という、このジャーナルのテーマを表したものである。本ジャーナルは、「Dynamic English」という言葉を使ったその他のプログラム、出版物、あるいは製品とは関係がない。

Printed in Japan

米国国務省の国際情報プログラム局は、eJournal USA のロゴ名で電子ジャーナルを発行し、米国や国際社会が直面する主要な問題、ならびに米国の社会や価値観、考え方、さまざまな制度について検証しています。

最新号はまず英語で発行され、続いてフランス語、ポルトガル語、ロシア語、スペイン語版が発行されます。必要に応じてアラビア語、中国語、ペルシア語の翻訳版が発行される場合もあります。ジャーナルはそれぞれ、発行巻数（出版された年の番号）と、号数（1年間に発行された各号の番号）別に目録に掲載されます。

ジャーナルの中で提示された意見は、必ずしも米国政府の見解や政策を反映するものではありません。米国国務省は、ジャーナルがリンクするインターネット・サイトの内容、およびこれらのサイトへの継続的な利用の可能性について、一切の責任を負いません。各サイトについての責任は、サイトの発行者のみに帰属するものとします。ジャーナルに掲載される記事や写真、イラストは、著作権についての明記がない限り、米国外での複製や翻訳を認めますが、明記があるものについては、ジャーナルに記載されている著作権保有者の許可を得なければなりません。

ジャーナルに関するご意見等は、米国大使館、アメリカンセンターJapan、および各地のアメリカンセンター・レファレンス資料室、または下記の編集部までお寄せください。

Editor, eJournal USA
IIP/CD/WC
U.S. Department of State
2200 C Street, NW
Washington, DC 20522-0501
USA
E-mail: ejusa-suggestions@state.gov

編集・発行：アメリカンセンターJapan(2014年8月初版)
本号の日本語文書は参考のための仮翻訳であり、正文は英文です。

本号について

イラン・スタバンスは、「変化はよいことだ」と題した記事で、辞書およびその作成者にとって最大の課題は、考えられる限りの語彙とその意味を辞書に掲載した途端に、早くもその語彙と意味が時代遅れとなり始めるという事実である、と指摘している。言語の変化の種類とそのプロセスに影響を及ぼす要因を説明する際にも、同様の課題が存在する。「変動する英語」という題のこのジャーナルは、世界で最も広く使われている言語が、技術、グローバル化、そして移民という諸要因の影響下でどのように進化しているかを探究したものである。

人気のあるメディアに触れたり、ブログその他のウェブサイトを読んだりする人たちはもちろんのこと、たいていの人々は毎日少なくともひとつは新しい英単語に出会う。とりわけ、外国に住む米国民は、英語の変化に敏感である。外国で暮らす米国人や、海外生活を終えて帰国した米国人は、聞き慣れない単語や言い回しに面食らい、そうした新しい言葉が急速に広まっていることに驚く。私が、「24/7(トウェンティフォー・セブン)」という言葉は初めて聞いたときには、すでにそれが、「1日24時間、1週間に7日、休みなく続く問題、サービス、プログラムなど」を指す言葉として、一般的に使われていた。また私は、ある大学生に何かを説明していたときに、彼女が意外な事実に対して「Shut-up! (黙れ)」と叫んだときのショックを忘れることができない。同席していた彼女の指導教官や同級生たちは、このやりとりで驚く様子はまったくなく、私が失礼な言葉だと教えられていたこの言い回しは、新しい使われ方をされているようだった。明らかに、「Shut-up」は、「嘘でしょう！」あるいは「ご冗談でしょう！」という意味で使われているのだった。

生きた言語はすべて進化するものであるが、中でも英語は変化しやすいようである。言語学者セス・レーラーは、著書「Inventing English: A Portable History of the Language」で、ベオウルフからチャーサーまで、また英国英語から米国英語の綴りや使用方法を作り出すウェブスターの試みから現代の英語の変化まで、歴史を通じた英語の変遷を検討している。彼によると、シェークスピアが作り出した新語だけでも6000に上り、こうした現象は米国英語に限られるものではない。「Do You Speak American?」というシリーズ番組を制作した米国の公共放送網パブリック・ブロードキャスティング・システム (PBS) によると、これまでのところ、最も多く新語を作り出した米国の大統領は、トーマス・ジェファーソンである。この番組のウェブサイトには、言語と文化の関係について、「言語は自らの変化の種をまく。そして、社会的背景が、そうした変化の成長と普及のための豊かな土壌を提供する」と述べられている。



© AP Images/Charles Krupa

近く出版される「メリアム・ウェブスター・カレッジ英英辞典」には、「Ginormous」をはじめ、およそ100の新語が加わる

しかし、こうした変化は望ましいものなのだろうか。PBSのシリーズ番組の制作者は、「私たちは昔に比べ言語能力が衰えているのだろうか。電子メールが英語をだめにしてしているのだろうか」という疑問を提起している。ジェフリー・ナンバークは、2001年の彼のエッセー集で、「米国英語は、外来語を取り入れることに関しては、常にかかなり開放的であった」と述べている。彼の考えは、言語でも食べ物でも、異なる文化の要素が混合されると、新たに面白く充実した結果が生まれる、というものである。ナンバークが批判の対象としているのは、新しい言葉を作って普及させる人たちよりも、言葉（あるいは言葉の使用者）の監視役を自認し、言葉の変化を憂慮する専門家たちである。レーラーは、本号の寄稿者の大半と意見を同じくし、次のように述べている。「われわれは、英語が乱れているという見方をすべきではない。英語の歴史は、発明の歴史であり、新しい言葉と新しい自己の発見の歴史であり、言語の市場で広く流通する可能性のある新語の作成の歴史である」

ナンバークが2004年のエッセー集の序文で述べているように、言語の変化は、社会そのものの重要な変化を示す手がかりとなり得る。米国の文化を定義するさまざまな特徴や価値観には、変化、革新、るつば、実用性、率直、といった言葉が含まれる。従って、米国英語が絶えず変化し、そうした変化が文化における他の変化を反映するものであるのは、当然のことかもしれない。

ロビン・L・イエーガー



米国国務省 2007年8月 第12巻 第8号

ダイナミック・イングリッシュ

4 変化はよいことだ

イラン・スタバンス

アマースト大学 (マサチューセッツ州アマースト市)

中南米・中南米文化教授

英語は、他のすべての生きた言語と同様、活気に満ち、予測不可能であり、絶えず変化している。

7 謎の解明—スラング解読のツール

A・C・ケンブ

ウェブサイト「スラングシティ」ディレクター。マサチューセッツ工科大学 (マサチューセッツ州ケンブリッジ市) 英語研究課程講師

インターネットには、米国のスラングの理解に役立つウェブサイトが多数ある。

11 ブログの言葉

国境なきレポーター

書籍「Handbook for Bloggers and Cyber-Dissidents」より転載。

13 若者の言葉

ロビン・フリードマン

ジャーナリスト・作家

若者たちは、新しいスラング表現の最前線にいる。

16 ゲームオン! 米国英語におけるスポーツ・娯楽分野のイディオム

ジーン・ヘンリー

作家・教師

米国では広く人気のあるスポーツやゲームから生まれた

イディオムが多い。

19 「What's New?」 ヒップホップ文化が日常英語に及ぼす影響

エメット・G・プライス3世

ノースイースタン大学 (マサチューセッツ州ボストン市)

音楽・アフリカ系米国人研究准教授

都会のヒップホップ世代の言葉が米国の主流文化にも入ってきている。

22 スパングリッシュ [La Lengua Loca]

イラン・スタバンス

アマースト大学 (マサチューセッツ州アマースト市) 中

南米・中南米文化教授

米国では、スペイン語と英語が融合してハイブリッド言語を形成している。

25 アラビア語から英語へ

アラン・ビム＝スミス

ジャーナリスト・教師

英語には、アラビア語を語源とする単語が多い。

30 馬の世界のアラビア語

ゲーリー・ポール・ナブハン

作家

馬や乗馬に関する英語の単語の多くは、スペイン語を介してアラビア語から入ってきたものである。

32 参考資料

変化はよいことだ

イラン・スタバンス



© AP Images/Moscow-Pullman Daily News, Geoff Crimmins

新しい辞書を見る8歳の子もたち

言語は、本質的に、社会における生きた、絶え間なく変化する力である。筆者は、そうした事実を称えるとともに、特に英語を活力に富む言語としている要因について述べている。イラン・スタバンスは、マサチューセッツ州アマースト市にあるアマースト大学の中南米・中南米文化ルイス・シブリング記念教授。著書に、「Dictionary Days」(グレーウルフ社)、「Love and Language」(エール大学出版部)などがある。

英語にはいくつ単語があるのだろうか。オックスフォード英語辞典(OED)によると、合計60万語以上である。もちろん、私たちは皆、そのうちのごく一部しか覚えることができない。正確にはいくつ覚えることができるのだろうか。その答はまちまちである。1人の人間の持つ語彙は、その人の一生を通じて、赤ん坊の片言のわずかな語彙から、流行語を駆使したティーンエイジャーの言葉、そして家庭・仕事・友人関係など異なる状況に応じて使い分けられる大人の語彙ま

で、非常に大きく変化する。実際のところ、語彙は一定したものではない。私たちが個人として常に変化しているというだけでなく、言語自体が静的なものではないのである。OEDは、歴史的な語彙集として、拡大を続けている。今日、OEDの単語収録数は過去最大である。しかし、収録されている語彙の非常に多くは、今日ではほとんど使われることのない古い言葉である。

これらはすべて、私たちの言語が持つ、一過性と永続性という2つの相反する性質を表している。変化しないのは死語だけである。例えばアラム語は、今日では主として歴史学者か宗教学者しか使わない。従って、アラム語で「ファクス」、「ソフトマネー」、あるいは「ステロイド」といった言葉に相当する単語を作る必要はない。アラム語の語彙は一定している。一方、多くの近代言語(標準中国語、英語、スペイン語、フランス語、ロシア語、アラビア語など)は、流動的である。これらの言語は、存続するために常に外へ向かい、外来語を



© AP Images/Shawn Baldwin

多様性に富むこの都会の風景は、米国の近代社会の構成を反映するものであり、言葉の融合の過程についてヒントを与えてくれるものである

輸入すると同時に、自らのデータベースを他の言語に輸出している。近代世界の移民の大きな波と、即時技術（テレビ、ラジオ、映画、インターネット）の発明が、言葉の交流を促進している。英語にはゲルマン語系の単語がいくつあるのだろうか。また、スペイン語に取り入れられている英語の表現はいくつあるのだろうか。その答も、「非常に多く」である。一過性と永続性との間の緊張が、存続のカギとなっている。すなわち、言語は、その中核を失ってしまうほど変化してはならないが、中核だけでは言語の活力を維持することができないのである。

言うまでもなく、言語によって変化の受容度が異なる。私はメキシコで生まれ、1985年に米国（正確にはニューヨーク市）に移住した。そして、米国英語の臨機応変な性質に感心した。私は、地下鉄に乗るたびに、何十もの異なる言語に触れることができた。全員に共通しているのは、英語をマスターしたいという願望だった。しかし、そうした願望に反して、彼らが母国から持ち込んだ言語も偏在した。その結果として生じていたのが、バベルの塔のような寄せ集めの言語だった。すなわち、どこへ行っても、耳に入ってくる英語は、純粋なものではなく、常に他のコミュニケーションの手段と相互に影響し合っていた。私もそうだったが、大勢の移民は、毎日の生活の中で英語を覚えた。より正式な学習の機会を与えられた移民もいたかもしれないが、そうした人々でさえも、大衆文化の浸透に強く影響された。そして、大衆文化とは、

厳格な規則に縛られないものである。それは、派手で、気まぐれで、混沌とした性質を好むものである。従って、大衆文化を通じた言語の機能を理解するには、大衆文化の自由性を理解しなければならない。

私の書庫には、たくさんの辞書がある。その大半は、単一言語の辞書である。歴史事典も何冊もある。アルゼンチンのスペイン語、米国南西部の英語、そしてケベックのフランス語の用語集など、国や地域別の辞典も持っている。また、医学、スポーツ、広告など、分野別の辞書もある。そして、2カ国語の辞書や、2巻から成るヘブライ語・ギリシャ語・ラテン語辞典のような多言語の辞書も持っている。私は、これらの辞書を座右に置くことで、刺激を得ている。聖書、ホメロス、そしてダンテから、シェークスピア、エミリー・ディッキンソン、アレン・ギンズバーグ、そしてデレク・ウォルコットまで、これまでに作られたあらゆる詩を構成する要素が、もちろんばらばらにはあるが、これらの辞典の中に収められている。私は、詩人とは言語の「発見者」であると思う。彼らは、言語に、それまではなかった新しい秩序をもたらすことによって、意味を作り出すのである。

辞書は、結合力のある言語を維持する上で不可欠なツールである。辞書は、英知を活用し受け入れるためのマニュアルであるとともに、昔の人々がどのように言葉を使っていたかを伝える記憶の箱でもある。また、辞書は、強制の手段ともなり得る。抑圧政治の時代には、専制政権が、反乱者による



© AP Images/Lynne Stalck

ニカラグア、タイ、およびエクアドル出身の3人の新しい米国市民。彼らは2007年6月13日、フロリダ州マイアミビーチ市で行われた宣誓式で、世界中から来た6000人の移民と共に、米国帰化市民となった

言葉の誤用、すなわち集団の伝統の乱用を証明するために辞書を利用する。辞書に関して、私が最も親しみと不満を感じるのは、その無効性である。辞書というものは、本質的に、自らの野心を達成できないものである。堅表紙のOEDが出版された時点で、その内容はすでに古くなっている。原稿が印刷に回された後で生まれた何千もの新語は掲載されていない。従って、シジフォスの神話のように、辞書の編纂者は再び、直ちに、絶え間なく、永久に、作業を続けなければならない。しかし、言語を封じ込めること、言語を管理可能とすることという彼らの目標は、不可能な作業であり、従って完全に成功することはないのである。生きた言語は、本質的に騒然としており、尽きることのないエネルギーにあふれている。

先に移民について述べたが、米国英語について言えば、米国のジャーナリスト、H・L・メンケンがいみじくも述べたように、米国英語の臨機応変な性質は、世界のあらゆる地域から集まってくる移民の活気ある存在によるものである。米国が正しく機能していれば、そうした移民は、比較的短期間に、社会のモザイクの一部となるために必要なだけの英語力を身に付けることができる。しかし、彼らの同化は、一方的なものではない。移民が米国市民となるに従い、米国も、彼らの存在によって変化していく。こうした相互作用は、特に

言語において顕著に見られる。アイルランド人、スカンジナビア人、ユダヤ人などの移民が、英語を流暢に話すようになる一方で、米国英語も、彼らが母国から持ち込んだ文法、表現、構文、その他の言語的要素を取り入れていった。そして、他の米国民もそうした要素を受け入れていったのである。

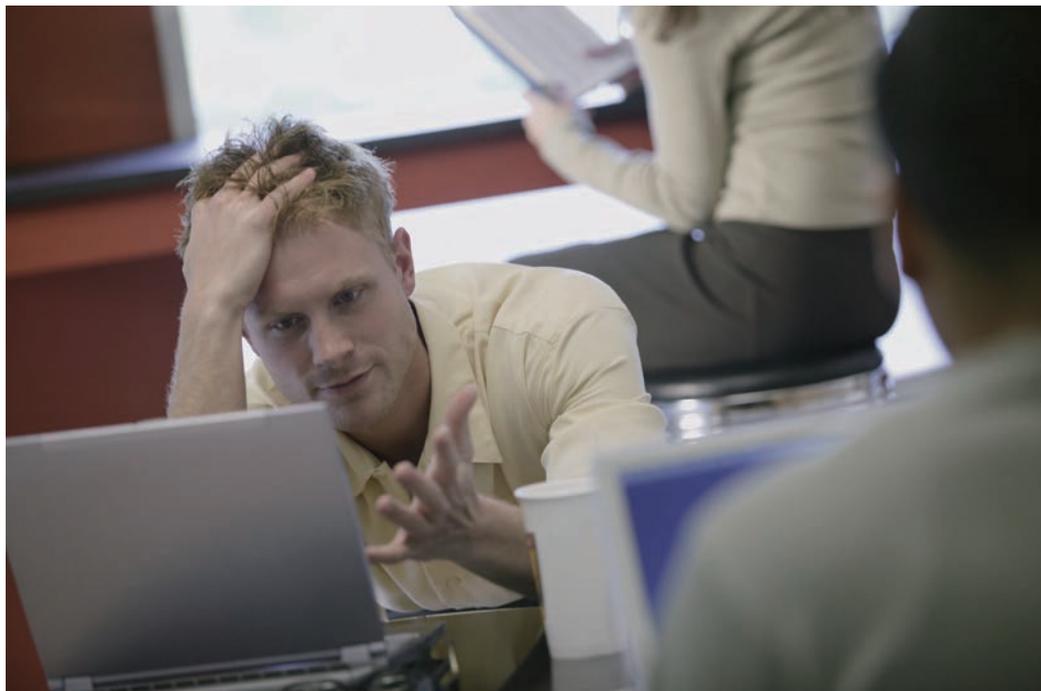
私の体験からは、辞書編集者が移民家庭の出身であることが多いが、これは意外なことではない。彼らの両親は、英語を学ばなければならなかった。従って、家庭内で、言葉について意見を戦わせる機会が多かったはずである。この言葉はなぜこういう綴りなのか。どのように発音するのか。語根は何か。私の体験から言えるのは、移民は転向者である、ということである。外から来た者として英語に接した移民は、強い信念をもって英語を受け入れ、英語を母国語とする者にはめったに見られないような熱意をもって、その文法を学ぶ。

従って、英語にはいくつ単語があるのか、という問いに対して、私は、「いつになっても決して十分とは言えない数」と答えたい。

この記事に述べられている意見は、必ずしも米国政府の見解あるいは政策を反映するものではない。

謎の解明 – スラング解読のツール

A・C・ケンプ



© 2007 Jupiterimages Corporation

辞書に載っていない言葉の意味を知るにはどうすればよいのだろうか？

英語は往々にして、外国人にとっても、英語を母国語とする者にとっても、難解である。筆者は、新しいスラングの意味を知るための手段を紹介する。A・C・ケンプは、米国のスラングに関するウェブサイト「スラングシティ」(<http://www.slangcity.com>)のディレクター。また彼女は、マサチューセッツ州ケンブリッジ市のマサチューセッツ工科大学英語研究課程で教鞭を取っている。

私は、12年前から外国語としての英語を教えているが、学生たちからは、単語を覚えれば覚えるほど、知らない単語がもっとたくさん出てくる、という不満をよく聞く。

その不満は理解できる。言語学習の最大の課題のひとつは語彙の習得であるが、英語は他のどの言語より語彙数が多いと言われている。さまざまな推定があるが、オックスフォード英語辞典第2版には、現在使われている単語17万語以上の定義が載っている。これは圧倒的な数であるが、毎年さらに増え続けている。

しかし、英語を学ぶ者にとっては、これらの正式な言葉も難しいが、それ以上に彼らを悩ませるのが非公式の言葉、すなわち俗語、大衆文化から生まれた言葉、そして仲間うちで使われる隠語などである。ティーンエイジャーを持つ親なら

誰でも経験しているように、こうした解読不可能とも思われる符丁は、英語を母国語とする者にとっても不可解であることが多い。

しかしながら、この言葉のミステリーを解決する手がかりがないわけではない。多少の努力とインターネットがあれば、あなたも立派な英語のシャーロック・ホームズになれる。

その第1歩は、何を探しているのかを明確にすることである。例えば、ポピュラー音楽では、歌詞がはっきりと発音されないことが多い。事実、歌詞の聞き間違いだけを紹介するウェブサイト (<http://www.kissthiscguy.com>) が人気を集めているほどである。私たちの脳

は、聞き慣れない言葉を聞くと、自然にもっと聞き慣れた言葉として理解してしまう傾向があるため、事態はさらに複雑になる。例えば、サンフランシスコのラッパーE-40の「get hyphy (ゲット・ハイフィー – 熱狂する)」という地域的なスラング表現を「get high fee (ゲット・ハイ・フィー – 高い料金を取る



スラングの解読には、名探偵の才能が必要なこともある



© AP Images/Tony Avelar

サンフランシスコを本拠地とするラッパーE-40は、非常に多くの新語を作り出しており、自らを「スラング学の王様」と称している

れる)」と聞いてしまう人もいるかもしれない。

幸いなことに、インターネットには、ファンが作成した歌詞紹介サイトが驚くほどたくさんある。また、さらに幸いなことに、ミュージシャン自身が自分の公式サイトに歌詞を掲載することも多い。同様に、テレビ番組や映画の台本をウェブサイトで見られる場合も多いため、「シンプソンズ」や「24」で聞いた筆記録に疑問があれば調べることができる。こうした筆記録は、完成した番組をそのまま書き写したものであるため、撮影段階で変更される可能性のある台本より正確である。

調べたい言葉が明確になったら、次にその定義を調べる。



© AP Images/The Tennessean, John Partipilo

映画「ザ・シンプソンズ MOVIE」では、テレビ番組「ザ・シンプソンズ」が生んだ数々の流行語が聞ける



© AP Images/Chris Pizzello

テレビ番組「24」のスター、キーファー・サザランド

意外なことかも知れないが、まず普通の辞書を調べてみるのも無駄ではない。多くの辞書は、毎年新しい言葉を追加している。また、「ワンルック」という便利なサイト (<http://www.onelook.com>) では、10種類以上のオンライン辞書を調べることができる。

真新しい俗語やスラングを調べるための最大のウェブ文献は、「アーバン・ディクショナリー」 (<http://www.urbandictionary.com>) である。このサイトの内容はユーザーが提供するもので、誰でも新語を追加することができ、事実何百人もの若者が毎日新しい言葉を提出している。言葉の定義が正確であるかどうかを他の読者が評価し、最も評価の高いもの

がサイトの上位に掲載されるため、サイト自体の精度が高まる。

こうしたシステムには長所と短所がある。まず、多くの評価を集めなかった言葉については、その定義が正しいかわからない。一方、同じ言葉が何度も提出されやすいため、求める情報を得られる確率が高まる。例えば、オンライン・コンピューター・ゲームで新米のプレイヤーを意味する「n00b (ニューブ)」という変わった綴りの言葉がある。実際に書かれたものを見ない限り、「O」という文字の代わりに数字のゼロが使われるとは考えもしないだろう。しかし、このサイトでは、この言葉の意味を、「noob」「nube」または「newb」という綴りでも調べることができる。

アーバン・ディクショナリーが、ティーンエージャーの新しい言葉の信頼できる辞書であるならば、これより規模の小さい「ダブル・タングド・ディクショナリー」(<http://www.waywordradio.org/double-tongued-dictionary/>) は、新聞や雑誌などの印刷物に見られる新しい造語や業界用語を調べるのに非常に役立つ。このサイトは頻繁に更新されており、ビジネス、スポーツ、政治など多種多様な分野で実際に使われている言葉の例が多数掲載されている。

俗語は特定のグループ内で使われることが多いため、例えばスケートボード競技会を観戦したり、19世紀米国のカウボーイに関する本を読んだり、あるいはヒップホップ音楽を聞いたりする場合には、それぞれ専門の辞書を調べる必要があるかもしれない。そうした内輪の言葉のガイドを調べるには、インターネットで、当該のトピックと「glossary (用語集)」または「dictionary (辞書)」で検索してみるとよい。

驚いたことに、そのような小辞典が、ほぼあらゆるスポーツ、趣味、職業について存在しているのである。

どのような辞書を使うにしても、常に気をつけなければならないのは、優れたミステリー作家が読者を混乱させるために必ず関係のない手がかりを文中に入れるように、英語の単語にも複数の意味があって、聞くものを混乱させる場合がある、ということである。米国のティーンエージャーが、あなたのお気に入りのTシャツを「sick (異常、悪趣味)」だと言ったら、あなたは侮辱されたと思うかもしれない。しかし、これは彼らの俗語では「かっこいい」というほめ言葉の意味も持つのである。従って、辞書に出ている定義をすべて読んだ上で、その言葉が使われた文脈に最も適したものを選ばなければならない。

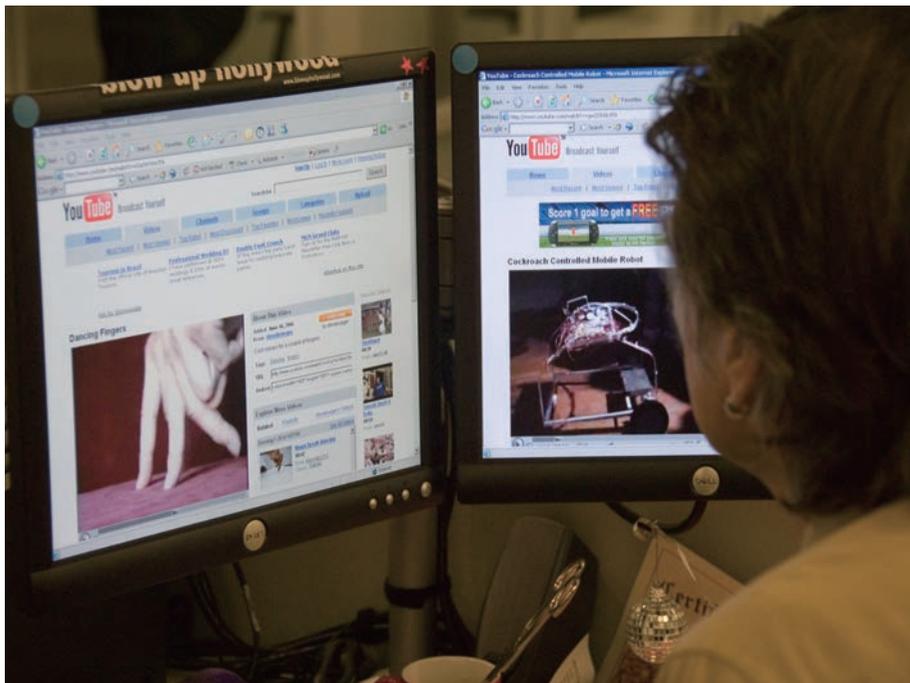
それでも、複数の俗語が組み合わせられると、特にほとんど知られていない文化に関する言葉の場合、意味の解釈が難しいこともある。そこで私は、映画からの引用や流行歌の歌詞を詳しく説明したサイト「スラングシティ」(<http://www.slangcity.com>) を立ち上げた。

最後に、「百聞は一見にしかず」ということわざがまさに当てはまるケースもある。アーバン・ディクショナリーでは、「skanking (スカンキング)」という言葉と、スカ音楽に合わせて「両腕を振りながらその場で走る」ように踊ること、と定義している。これだけではどういうものなのか想像しにくければ、「ユーチューブ」(<http://www.youtube.com>) で、この奇妙なダンスのビデオをいくつも見るとともに、スカ音楽の実例を聞くことができる。このほかにも、「フリッカー」(<http://www.flickr.com>) などの写真共有データベースでは、

ヘアスタイル、カー・アクセサリ、身振りなどに関する俗語を写真付きで調べられる。どの写真にも内容を説明するタグがついているため、知りたい言葉を容易に探すことができる。

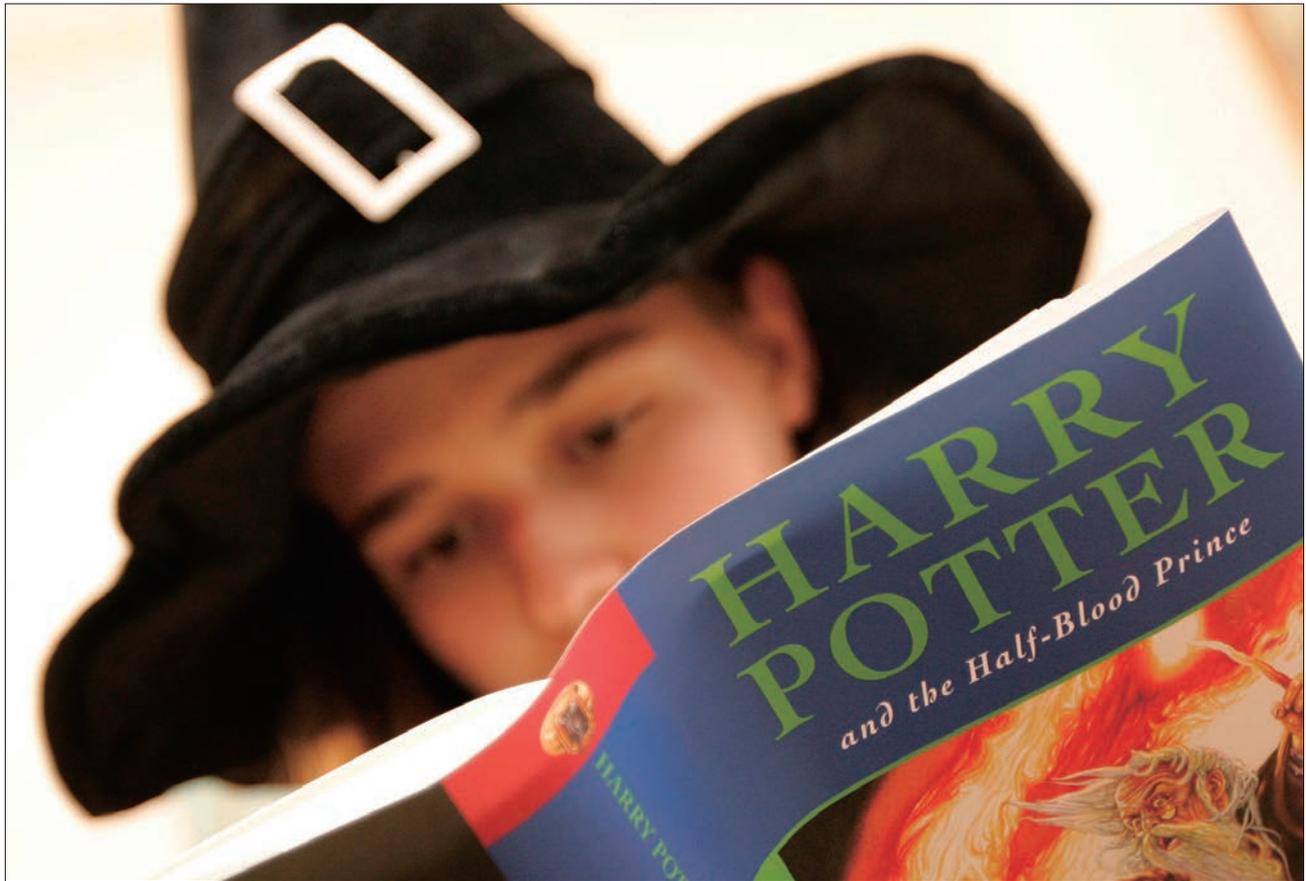
このように、あらゆる種類の英語について、オンラインの文献がある。シャーロック・ホームズの助手はワトソン1人だったかもしれないが、英語の言葉の探偵には、何百ものオンラインの助手が付いており、英語の秘密を明かしてくれる。マウスをクリックすれば、この絶え間なく進化する言語のミステリーが解明できるのである。

上記のサイトに加えて、以下のようなオンライン辞書も役に立つかもしれない。



スラングを説明する「ユーチューブ」のビデオ

© AP Images/Cameron Bloch



© AP Images/Franka Bruns

J・K・ローリングの「ハリー・ポッター」は、読者に多くの新語を提供した

変わったオンライン・ミニ辞書の例

The Rap Dictionary: <http://rapdict.org>
ラップ音楽のスラング

Old West Legends: <http://www.legendsofamerica.com/WE-Slang.html>
1800年代の米国西部のスラング

Skateboarding Glossary: <http://www.exploratorium.edu/skateboarding/largeglossary.html>
サンフランシスコのエクスペラトリウムによるスケートボード用語集。スケートボードのトリックのビデオも見られる。

Slang from the Great Depression: <http://xroads.virginia.edu/~MA04/hess/Slang/slang.html>
1928～1941年の時代のスラング

歌詞やテレビ番組・映画の筆記録のサイト

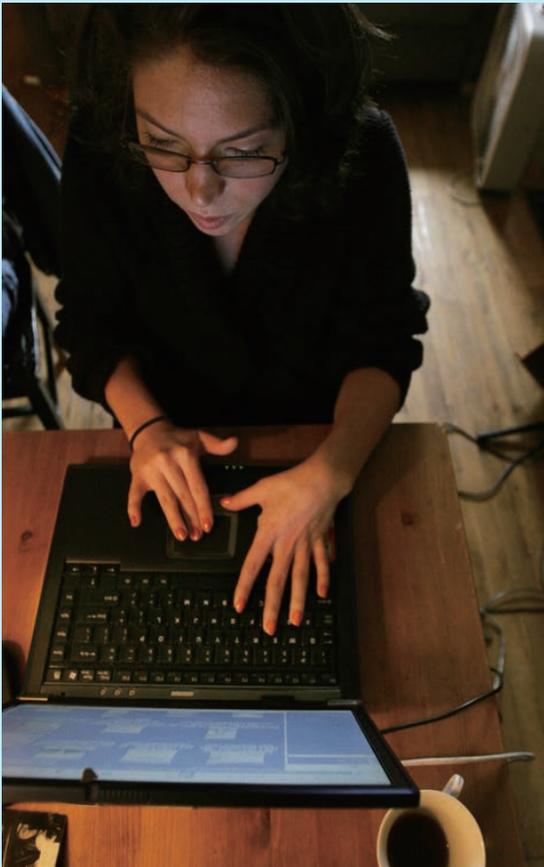
Leo's Lyrics: <http://www.leoslyrics.com/>
アーティスト、題名、またはキーワードで検索できる歌詞データベース

Drew's Script-O-Rama: <http://www.script-o-rama.com>
新旧の映画やテレビ番組の台本と筆記録

この記事に述べられている意見は、必ずしも米国政府の見解あるいは政策を反映するものではない。

ブログの言葉

Pointblog.com より



© AP Images/Bebero Matthews

ジュリア・ラングバインさんのブログは熱心な読者を集めている

Blog (ブログ) - 「ウェブログ」の短縮形。通常1人の作者が、個人的に、文章、リンク、あるいは写真などを定期的に掲載しているウェブサイト

(To) blog (ブログ) - ブログを運営する、ブログに文章などを掲載する

Blogger (ブロガー) - ブログを運営する人

Blogsphere (ブロゴスフィア) - あらゆるブログ、ブログのコミュニティ

Blogroll (ブログロール) - あるブログに掲載されて

いる外部リンクのリスト。他のブログにリンクするものが多く、通常ホームページの欄に掲載されている。友だち関係にあるブロガーから成る「小コミュニティ」であることが多い

Blogware (ブログウェア) - ブログの運営に使われるソフトウェア

Comment spam (コメント・スパム) - 電子メールのスパムのようなもの。ロボットの「スパムボット」が、コメントを装った広告をブログに大量に送りつける。これは深刻な問題となっており、ブロガーおよびブログ・プラットフォームは、一部のユーザーやメールアドレスからのコメントを禁止するツールで対抗しなければならない

Content syndication (コンテンツ・シンディケーション) - サイトの作者または管理者が、そのコンテンツの全部または一部の、他のウェブサイトへの転載を許可する方法

Moblog (モブログ) - 「mobile blog (モバイル・ブログ)」の縮約形。電話またはデジタル・アシスタントなどによって、どこからでも遠隔操作で更新できるブログ

Permalink (パーマリンク) - 「パーマネント・リンク」の縮約形。ブログに掲載された各項目のウェブアドレス。ブログに載せられた各記事に割り当てられたウェブアドレス。記事がアーカイブされた後もブックマークを永続的に残すための便利な手段

Photoblog (フォトブログ) - 大部分が写真から成るブログ。写真は絶えず時系列的にアップロードされる

Podcasting (ポッドキャスト) - 「iPod アイポッド」と「ブロードキャスト」の合成語。オーディオまたはビデオをブログおよびそのRSS フィードで、デジタルプレーヤー用に提供すること



© AP Images/Karen Tam

作業中のポッドキャスター

Post (ポスト) – ブログに載せられた記事。メッセージもしくはニュース、または単に写真もしくはリンクの場合もある。通常短いもので、外部リンクを含み、ビジターがコメントできるようになっている

RSS (Really Simple Syndication) – ウェブサイトの更新情報を管理するための手段。ユーザーにお気に入りのブログが更新されたことを知らせることができ、特にブログでの使用に適している。また、当該サイトのコンテンツを他のウェブサイトが(簡便かつ自動的に)複製することを許可することによって、コンテンツを「配給」することができる。特にマスコミのウェブサイトで急速に広がっている

RSS Aggregator (RSS アグリゲータ) – プロガーが、

特にお気に入りのブログの最新更新情報をはじめとする RSS フィードを読むためのソフトウェアまたはオンライン・サービス。リーダーまたはフィードリーダーともいう

RSS Feed (RSS フィード) – ブログの最新記事を含むファイル。RSS アグリゲータ (RSS リーダー) を使って読む。ブログがいつ更新されたかを示す

Trackback (トラックバック) – あるブログの記事が他の記事を参照した場合に、ウェブサイト間でその旨を自動的に通知し合うための手段

Web diary (ウェブ・ダイアリー) – ブログ

Wiki (ウィキ) – 語源はハワイ語の「ウィキウィキ(すばやく)」。ビジターが誰でも容易にかつ迅速に更新できるウェブサイト。ウィキを作成するためのツール(ウィキ・エンジン)を指すこともある。ブログとウィキは、類似点もあるが、明確に異なるものである

この「ブログの言葉」は、「国境なきレポーター」(<http://www.rsf.org>) 発行の「Handbook for Bloggers and Cyber-Dissidents」(http://www.rsf.org/IMG/pdf/handbook_bloggers_cyberdissidents-GB.pdf) から許可を得て抜粋・転載したものである。



© AP Image/Dino Youmas

Jobspot では、ウィキ・ソフトウェアを提供している

若者の言葉

ロビン・フリードマン



受信メッセージ「How RU?」

ティーンエージャーがこの世に現れたときから、スラングは存在していたと思われる。今日、電子的な通信手段の発展と、一部の学者の間で見られる考え方の変化によって、スラングは話し言葉の世界から書き言葉の世界にも広がり、その受容度が高まっている。ロビン・フリードマンは、ジャーナリストであり、児童およびティーンエージャー向けの著書が数冊ある。

英語が短くなっている、という印象があるとしたら、それは事実かもしれない。ニュースの抜粋から携帯メール、そしてまん延する集中力の欠如まで、さまざまな理由で私たちの言葉は短くなり、スラングの使用度が高まっている。

それはなぜだろうか。

いくつかの原因が考えられる。それは、避けることのできない技術の氾濫と息つく暇もない多忙な生活、いつの世にも存在するティーンエージャーの俗語への誘惑、そして従来、必然的にプラスよりマイナスの方向へ進んでいく進化の流れなどである。

今日、私たちの毎日のコミュニケーションは、電子メールだけでなく携帯メール、そしてさらに小さい装置も含め、オンラインで行われる比率が非常に高くなっているため、日常

の英語が、公認の省略形、意味不明な数字と文字の組み合わせ、そして時には顔の表情を表す記号に成り果てたように思える。)

小文字だけしか使われないことも多い。

数字の中でも、「2 (ツー)」「4 (フォー)」は、「to (ツー)」「for (フォー)」の代わりに使われて大活躍している。さらに興味深いのは、数字の「3」が文字「e」の代わりに使われたり(「b3」「th3)」、数字の「8 (エイト)」が「エイト」という発音の文字に変わって使われたりする例(「gr8 (great)」「l8r (later)」)である。

こうした斬新な略語の中には、意味が一目瞭然であるもの(例えば「you」が「u」に、「your」が「ur」になる)、比較的理にかなったもの(「before」が「b4)」、文字の名前の発音を利用したもの(「cutie (かわいこちゃん)」が「qt)、「see you (またね)」が「cu)」、言葉の省略形であるもの(「because」が「cuz)」、単なる頭字語(「best friends forever (永久に親友)」が「bff) などがあり、中には奇妙と言ってもよいもの(「people」が「peeps)もある。

そして、皮肉なケースとして、スラングが元の言葉より長くなっている例さえある(「i luv u」が「i heart u)。

しばらく前から使われているスラングの中には、かなり広



© AP Images/Marcio Jose Sanchez

面と向かった会話でも、携帯などによるチャットでも、おしゃべりはティーンエージャーの生活の重要な部分を占める

く知られているものもある。例えば「lol (laughing out loud - 大笑い)」「btw (by the way - ところで)」「imho (in my humble opinion - 私の愚見では)」などである。

一方、不可解としか言いようのないものもある。「iykwim (if you know what I mean - 私の言いたいことがおわかりでしょうか)」「mtfbwy (may the force be with you - フォースがあなたと共にありますように)」「wysiwyg (what you see is what you get - 見たとおりのものが結果に反映される)」などである。

言語学者やコンピューターおたくは別として、私たちはこうしたアルファベット・スープのような略語の洪水に頭が混乱することもある。しかし、車を運転しながら、つまようじサイズの器具を使って社内連絡をしなければならないときには（これはほめられたことではなく違法でさえあるが、残念ながらよく見られる光景である）、こうした略語の効率性、そして必要性さえも認めざるを得ない。

しかし、上記の例は、「peeps」を除き、すべてが主として書き言葉のスラングである。話し言葉のスラングは、また別の世界である。そして、若い世代が文字どおり発言権を持っているのは、この世界である。

今日のスラングは、昨日のパスワードより迅速に変化する。ほんの1～2年前に流行っていた言葉が、今日のティーンの間では、特に理由もなくすたってしまうからである。「phat (ファット)」「sweet (スウィート)」「excellent (エクセレント)」「awesome (オーサム)」（どれも「good」と同義語）などがそうである。「いかにも90年代っぽいね、dude(デュード)！」

しかし、スラングと言うのは本質的に短命なものである。スラングをスラングたらしめているのは、その新鮮さである。スラングは、ファッションと同じで、「最新流行」であり続けることはできない。どんなに流行った言葉でも、いずれは米国民に飽きられ、自然淘汰によって強者だけが生き延びるのである。

では今の時代、というより今月はどんな言葉が流行っているのだろうか。

「良い」あるいは「魅力的」という意味で「hot (ホット)」という言葉を使うのは、今風である。あるいは「cool (クール)」である。「Cool」は、温度を表す場合「hot」と意味が反対であるが、大恐慌時代

以来どの世代にも使われてきたスラングである。

「Cool」は、スラングとしては先史時代のものと言ってもいいほど古い。このスラングは、1930年代後半のジャズ文化から生まれたが、その後どの世代もそれぞれ独自の使い方をしてきた。

同様の意味を持つスラングがいくつもあるが（「bully (ブリー)」「groovy (グルービー)」「hep (ヘップ)」「crazy (クレージー)」「bodacious (ボデーシヤス)」「far-out (ファアアウト)」「rad (ラッド)」「swell (スウェル)」)、いずれも「cool」ほど長続きしなかった。

「Cool」は、今日のティーンエージャーだけでなく彼らの親の世代にも使われている。大人が子どもたちの流行り言葉を横取りするのは今に始まったことではないが、今日では、文字どおり若者の世代に語りかける言葉を知っているかどうか、商売繁盛と破産の分かれ目となり得るのである。若者市場のトレンドを追跡する調査会社テラー・グループによると、米国市場の年間総売上高のうち1700億ドルをティーンエージャー層が占めている。

従って、マスコミ、大衆文化、そして中年世代の間にも、さまざまなスラングが浸透していることもうなずける（「stick it to the man (権威に反抗する)」「you rock (すごいね)」「whatever (どうでもいいけど)」「old school (伝統派)」「talk to the hand (聞きたくない)」など）。

もともと、各世代が独自の語彙を築くことができるというのが、スラングならではの魅力である。その結果として、言葉の面白さを楽しむための、遊び心のある言語が誕生する。

しかしながら、こうしたスラングは、悪の世界から生まれ



© AP Images/John Raoux

インスタント・メッセージ (IM) で使われる言葉や綴りを挙げて、授業で提出するレポートなどにはこうした言葉を使わないよう指導する米国の教師。IM用語を日常的に使う生徒たちが増えている

る傾向があるため、不快な言葉もある。昔から、スラングに反対する人たちは、スラングが国民の言葉の品位を落とす、と主張してきた。しかし、こうした非難は、むしろスラングの持つ力を証明するものである。スラングは本質的に、標準英語より才気に富んだ言葉である。スラングは、覚えやすく、ユーモアのひらめきを、そして詩さえも生むことができる。

1898年に初めて出版された辞書「メリアム・ウェブスター・カレッジ英英辞典」の第3版(1961年)は、辞書に掲載する語彙について少数の学者の意見を参考にするという従来の方法を変え、大衆向け出版物をも参考にするようになった。

史上初めてスラングを載せたウェブスターの第3版は、「醜悪」、「嘆かわしい」、「恥ずべきこと」などと酷評された。

しかし今日では、一部に苦情はあるものの、どのような辞書にもスラングが載っている。「規範主義」を支持する学者たちは、辞書とは言語の正しい使用法を教えるのもであると主張し、これに反対する人々に対しては、無学を推進していると非難し、彼らを「lexicographer (辞書編集者)」ならぬ「lexicographers (だらしのない辞書編集者)」とさえ呼んでいる。

一方で、「記述主義」の学者たちは、広く使われている言葉はすべて辞書に載せるべきであると考えている。彼らは、適切な言葉を使うことより、コミュニケーションを成功させることを重視する。すなわち、意思の伝達に際しては、どのような言葉を使うかということより、全員が理解できることが大切である、と考える。

古い世代は、古き良き時代へのノスタルジアから、あるいは妙な新語への不快感から、若者が主導する言葉の変化に抵抗するかもしれない。

しかしながら、現実には、正しい言語というもの存在しない。言語は時とともに変化するものだからである。

1930年代、40年代には、スウィングとジルバの文化が当時の流行を生んだ。1950年代にはビート族の詩人と早口のラジオのディスクジョッキーが、そして1960年代にはヒッピー族が流行語を作り出した。今日のスラングは、ヒップホップ文化とラップ音楽から生まれている。

そこで最後に一言。「Capiche, yo? (わかった?)」

この記事に述べられている意見は、必ずしも米国政府の見解あるいは政策を反映するものではない。

ゲームオン！

米国英語におけるスポーツ・娯楽分野のイディオム

ジーン・ヘンリー



© AP Images/Paul Sakuma

「ゲームオン」の宣言と共にプレーヤー全員がビデオゲームを再開する

米国英語では、スポーツやゲームから生まれたイディオム（慣用句）が広く使われている。この記事では、筆者が、日常の会話やマスコミで使われているイディオムを紹介する。ジーン・ヘンリーは、元教師および第2言語としての英語教授。著書に「How to Play the Game: American English Sports and Games Idioms」がある。カリフォルニア大学バークリー校、ハーバード大学卒業。ペンシルベニア州フィラデルフィア市のテンブル大学および英国オックスフォード大学でも学んだ。

英語は、動的な変動する言語である。その言語の性質上、常に単語や言い回しが新たに加わったり消えていったりする。「ニュー・オックスフォード・アメリカン・ディクショナリー」の昨年の版には、「carbon neutral（カーボン・ニュートラル）」という言葉が加えられ、気候変動に対する懸念の

高まりを反映して、「今年の新語大賞」に選ばれた。「Blog（ブログ）」「to blog（ブログを書く）」、そして「blogging（ブログを書くこと）」という新語はすでに一般的な語彙の一部となっている。このような動的な性質は、米国で使われるイディオムや比喩的な表現にも見られる。

イディオムとは、文字通りの解釈では意味がわからないが、派生的な意味を持つ表現のことである（ウェブスター辞典によると、イディオムとは、「長年使われているうちに常用句となった、特異な表現」である）。どの言語にもイディオムはあるが、米国英語の口語には特にイディオムが多い。

米国のイディオムは、スポーツやゲームなどさまざまな文化から生まれている。特にスポーツの世界では、くだけた雰囲気の中でアナウンサー、ファン、そして選手自身が使う言葉や言い回しが、他の世界でも使われるようになった例が多く見られる。スポーツ用語は絶えず変化している。バスケット



スラムダンクを決めるプロ・バスケットボール選手

© AP Images/Nikki Boertman

トボールで、リングのすぐそばからボールを放つ簡単なシュートを指す「lay-up (レイアップ)」という言葉は、一般社会でも「簡単な作業」という意味で使われていたが、近年、選手の体格と運動能力が向上し、ボールをリングの上から強くたたきつけるようにシュートする「slam-dunk (スラムダンク)」が一般化するにつれて、スラムダンクという言葉が、簡単な作業という意味で使われるようになった。

米国のイディオムや比喩的表現、特にスポーツやゲームで使われるそうした表現の知識は、米国の口語をマスターする上で不可欠である。スポーツの試合は、米国民の心をとらえる。プレーに関連する言葉が、職場やビジネスの場で使われている。「pinch hit (ピンチヒッターに立つ)」という野球用語と「carry the ball (ボールを持って走る)」というアメフト用語は、一般社会では「代役を務める」あるいは「同僚や上司に変わってプロジェクトを進める」という意味で使われる。スポーツのルールや用語、そしてそこから生まれた表現を知らないと、コミュニケーションに支障が出る。

用語やイディオムの使われ方は、そのスポーツの人気度、

国家全体の心理状況、地域、そして話者によっても異なる。例えば、ヨットの世界から生まれた「take a new tack (新しい方法を試みる)」「bail out (救済する)」といった表現は、米国中部より西海岸や東海岸で広く使われ、特にヨットを趣味とする人たちが頻繁に使うものと思われる。また米国では、野球とアメフトの人气が非常に高いため、この2つのスポーツから生まれたイディオムが多い。

連邦議会上院で行われたコンドリーザ・ライス氏の国務長官指名承認公聴会で、ある共和党上院議員は、ライス氏の応答について、フットボールにたとえて、「(前略) ライス氏に対して、バンプ・アンド・ラン戦略が使われたが、彼女はほとんどペースを乱されることはなかった」と評した。

国際的に使えるイディオムもある。ニューヨーク・チケットマスター (スポーツ・娯楽のチケット販売店) の宣伝には、ボールの絵と共に「Always on the ball (常にボールに注意を集中します)」と書かれているが、これは翻訳すれば世界中の人が理解できる。スタンフォード大学のデービッド・G・ビクター教授が、ブッシュ大統領の温室効果ガス排出削減の世界的目標について語るときに使った「game plan (ゲーム・プラン)」という言葉も同様である。2007年6月1日付「ニューヨーク・タイムズ」紙の記事によると、ビクター教授は、この目標は「何らかの明確な (米国内の) ゲーム・プランがなければ、国際的に真剣に取り上げられることは難しい」と述べた。

しかし、もう少し分りにくいイディオムもある。2007年6月4日付「ニューヨーク・タイムズ」紙の「ロムニー氏の政治資産は、同氏の事業収益によるもの」と題した記事によると、「ベイン社 (ロムニー氏の会社) とその共同投資者らは、各社から1億ドルを超える特別支払いを受けたため、ベインは事業を転売する前にすでにかかなりの利益を上げることができた。これは『餌を取り返す』といわれるやり方であ



ボールを持って走る (「carrying the ball」) アメリカン・フットボールの選手

© AP Images/Darron Cummings



© The New Yorker Collection 1988 Henry Martin from cartoonbank.com. All Rights Reserved.

run to left field with two strikes against him (彼はツーストライクから左翼にホームランを打った)」というように使われる。イディオムとしては「He had two strikes against him when he interviewed for the job, because he had no experience (彼は就職の面接に際して、仕事の体験がなかったため、不利な状況にあった)」というように使うことができる。

「play hardball(硬球でプレーする - 強気な態度を取る)」のように、イディオムとしてのほうが広く使われる表現もある。「Let's play hardball on this contract」という文章は、「この契約の交渉では、相手にほとんど譲歩しない姿勢で臨もう」という意味である。この意味での表現の方が、硬球で試合をするという本来の意味の表現より広く使われている。

多くの場合、イディオム表現は、学校、ビジネス、政治など、その表現が使われる背景に応じて理解される。イディオムの理解に窮した場合は、後

る」これは、釣り用語がイディオムとして使われている例である。

外国人にとってイディオムは、その出典を知らないと、意味を理解することが難しい。イディオムを理解するには、カテゴリー別に考えることが役に立つ。バスケットボールやフットボールのようなチームスポーツには、外国のチームスポーツにも共通する規則、用語、競技場などの要素がある。トランプのゲーム、狩猟、釣りなどは、外国にも同様のものがある。こうした枠組みと背景から発生した言葉であることを理解していると、その言葉の文字どおりの意味と慣用句的な使い方を学びやすくなる。また、米国のスポーツやゲームに親しむためには、野球、フットボール、あるいはバスケットボールの試合や、オリンピックの試合などをテレビで観戦することが役に立つ。文章の意味を理解するには、その文脈を知ることが大切である。「Two strikes against him (彼はツーストライクに追い込まれた - 彼にとって不利な状況である)」というイディオムは、バッターがあとストライクひとつでアウトになる、という状況を表す野球の表現から発したものである。文字どおりの意味としては「He hit a home

で誰かに聞いたり、イディオム辞典やインターネットで調べたりすることができる。そして意味を理解したら、今度は練習のため、できれば英語の口語をよく知っている友人を相手に自分で使ってみるとよい。

この記事に述べられている意見は、必ずしも米国政府の見解あるいは政策を反映するものではない。

「What's New?」ヒップホップ文化が 日常英語に及ぼす影響

エメット・G・プライス3世



© AP Images/Jim Slosiarek/The Gazette

ミシガン州の青少年センターで、ヒップホップをテーマとした壁画制作の合間にブレイクダンスの技を披露するアーティスト

都会の若者の作った言葉が、いわゆるヒップホップ世代を介して英語の主流に入り込んでいる。筆者エメット・G・プライス3世は、マサチューセッツ州ボストン市にあるノースイースタン大学の音楽・アフリカ系米国人研究准教授、「ジャーナル・オブ・ポピュラー・ミュージック・スタディーズ」誌編集長。著書に「Hip Hop Culture」(ABC-CLIO社、2006年)がある。また、近刊予定の「Encyclopedia of African American Music」(全3巻)(Greenwood Press社、2008年)の編集責任者。

言葉は社会の産物である。社会の変化と共に言葉も代わる。言語の変化を表す最大の徴候のひとつは、語彙の急速な拡大

である。過去30年間、米国の辞書の内容は、前例のないペースで拡大を続けている。世界各地の文化が米国の文化に及ぼしている豊かな影響を示す外来語、科学の世界で作られた新語、技術の発展を表す言葉、そして言うまでもなく現代の文化を代表する新語が、英語の拡張に貢献している。しかし、その中でも最も急速に英語を変化させているのが、現代の文化を表す新語である。

こうした変化の火付け役となっている若者たちは、自分たちにとっての現実を新しい言葉で表現することを自らの権利と考えている。それは、新しい考え方、新しい探索、新しい欲求、そして新しいアイデア(たとえそれが実際にはそれほど新しいものではないとしても)を表現する言葉である。

バカリ・キトワナは、「The Hip Hop Generation」で、1965年から1984年までに生まれた世代を、ヒップホップ世代と定義している。しかし、1984年で区切るのは早すぎることは明らかである。われわれが実際に見てきたように、その後も複数のヒップホップ世代が生まれており、各世代が英語に新たな言葉や用法をもたらしているからである。



© AP Images/Stephen Chernin

ヒップホップ文化のバイオニアであるラッセル・シモンズ氏は、ヒップホップ・コミュニティのスポークスマンであり支持者である

ヒップホップ文化

1960年代および70年代に、ニューヨークの町で暴力と社会的な腐敗と経済の衰退が広がる中で、都心部の多民族社会の若者たちは、日々直面しなければならない困難に対処するための独自の手段を考え出した。すでに存在していたラップ、落書きアート、ダンス、ディスクジョッキー（サウンド機器とレコードを使って、スクラッチ、リピート、リミックスなどの手法で、元の録音とは違うまったく新しいサウンドを作り出すこと）などの要素を組み合わせ、多様な背景を持つこれらの若者たちは、自分たちの住む町の希望のない状況から逃れることのできる世界を築いた。

1970年代半ばを通じて、この地域的な現象は米国の主流からは無視されていたが、1980年代までには、ヒップホップ文化が全国的な現象となっただけでなく、国際的にも人気を集めていた。「Wild Style」「Style Wars」、そして後には「Beat Street」「Breakin'」といった映画が、世界中の観衆にヒップホップ文化のさまざまな側面を紹介した。ヒップホップのユニークな英語の話法や書き方も例外ではなかった。1990年代までには、出版・放送メディア、そしてビデオゲームの世界においてさえも、ヒップホップ文化の存在と影響が極めて大きくなっていった。バーガー・キング、コカ・コーラ、アメリカ・オンライン（AOL）、ナイキ、リーボックといった大企業が、ヒップホップの人気とイメージに乗って、ヒップホップ文化をテーマとした宣伝・販売促進キャンペーンを展開し、同時にヒップホップ文化をより幅広い文化に統合させることに貢献した。ヒップホップのダンス、ファッ

ション、そして数々の音楽的な要素に加えて、新しい英語の話法と文法が、多くの人々の耳をたちまちとらえた。

ヒップホップの言語

米国のポピュラー文化は、何世代にもわたって、日常英語に独自の影響を及ぼしてきた。アフリカ系米国人の音楽が果たしてきた役割は、さまざまな面で、こうした進化を実証するものである。霊歌やブルースの発生以前から、アフリカ系米国人の音楽は、その聴衆（当初は主として黒人）に、その文化ネットワーク内だけで通じる特殊な言語を使って、社会の出来事や解放の戦略を伝える役割を果たしていた。

長年の間に、それ以外の社会の人たちが、そうした言葉や言い回しの意味や使い方を知って、それぞれの社会で使うようになった。このような文化的な適応のプロセスは、米国内のさまざまな民族社会で見られるが、アフリカ系米国人の音楽に特有の言語は、米国の主流文化に広く影響を及ぼした。

ヒップホップ文化の言語には、過去の言語の歴史が新しい形で生きている。「hot（ホット）」（1920年代）、「swing（スイング）」（1930年代）、「hip（ヒップ）」（1940年代）、「cool（クール）」（1950年代）、「soul（ソウル）」（1960年代）、「chill（チル）」（1970年代）、「smooth（スムーズ）」（1980年代）といった各時代のスラングが、ヒップホップ言語では新しい意味で使われるようになってきている。「いま何が新しいか」という永遠の問いに対する次世代の答が、ヒップホップの言語なのである。

ヒップホップ文化の影響

ヒップホップ文化がもたらした最大の影響は、あらゆる信念、文化、人種、民族の若者が（そして今や中年も）、独自の方法で自らを表現するための媒体となって、こうした人た



© AP Images/The Plain Dealer; Roadell Hickman

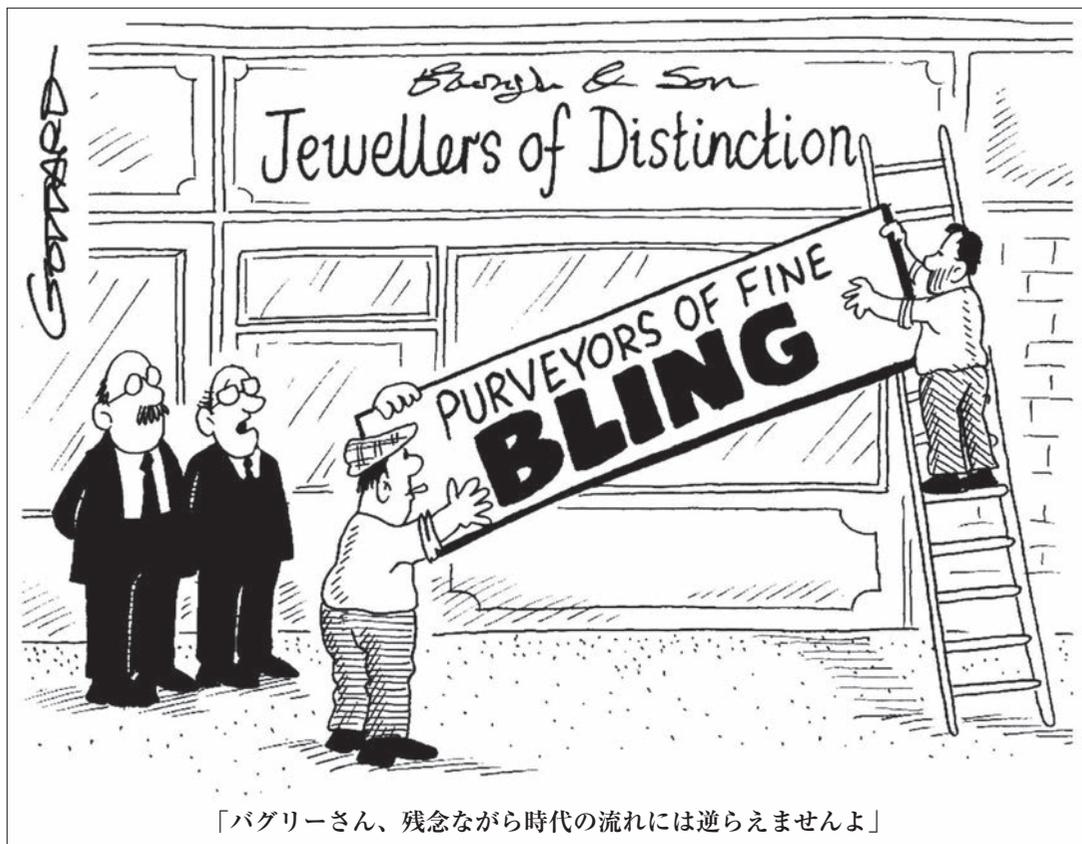
このオハイオ州の子ども向けサマー・アート・キャンプのような公式のプログラムでさえも、若者の注意を引くためにヒップホップのテーマやイメージを使っている

ちを個人としても集団としても団結させたことであると思われる。ヒップホップ文化は、米国英語だけでなく、世界中の多くの言語に影響を及ぼした。多様な文化を持つ諸国には、活気に満ちたヒップホップ社会があり、そこでは独自の方法でこうした新しい単語や言い回しを取り入れている。ドイツのヒップホップ、オーストラリアのヒップホップ、ピノイ・ラップ(フィリピン)、そしてアゼリ・ラップ(アゼルバイジャン)からラップ・ニジェリエン(ニジェール)まで、ヒップホップはこれらの国々の言語と文化に影響を与えている。

2003年に「オックスフォード英語大辞典」に「bling-bling (ブリング・ブリングー派手なアクセサリ)」という言葉が載せられ、2007年には「メリアム・ウェブスター・カレッジ英英辞典」に「crunk (クランクーヒップホップ音楽の一種)」という言葉が加わった。ヒップホップ文化は、英語という言語の性質、発音、そして文法を変えつつある。「hood (フッド)」「neighborhood (ネイバーフッドー近所)」の短縮形、「crib (クリブーすみか)」「whip (ホイップー自動車)」といった言葉は、日常会話で使われるようになってきている。「What's up (ホワッツアップー元気?)」「peace out (ピースアウトーバイバイ)」、そして特に「chill out (チルアウト

ー落ち着け)」といった言い回しは、テレビ番組、映画、そしてフォーチュン500社の企業のコマーシャルでさえもよく聞かれる。米国英語は生きた有機体であり、ヒップホップ文化や急速に伸びる科学技術などの活発なメカニズムの影響を受けて、今から30年後にはどのような形の英語が話され書かれているのか、予測することは難しい。「タイム」誌1999年2月5日号の表紙に書かれていたように米国が「ヒップホップ国家」であるかどうかは別として、英語がヒップホップ文化の多大な影響を受けていることは明らかである。

この記事に述べられている意見は、必ずしも米国政府の見解あるいは政策を反映するものではない。

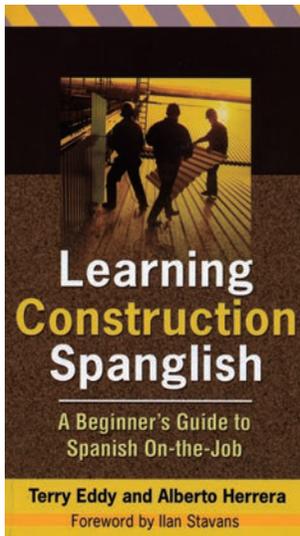


「バグリーさん、残念ながら時代の流れには逆らえませんよ」

この英国のマンガでは、宝飾店の看板を、「宝飾品」を意味する新しいスラング「bling (ブリング)」を使ったものにかき替えている

スパングリッシュ「La Lengua Loca」

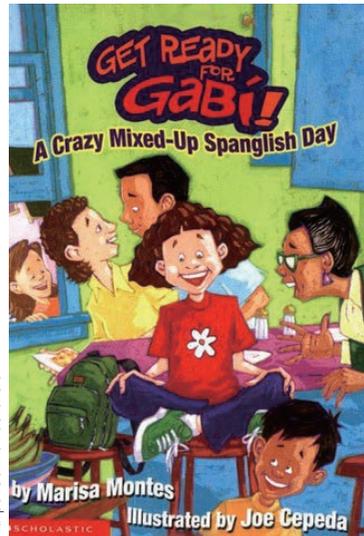
イラン・スタバンス



Learning Construction Spanglish, Terry Eddy and Alberto Herrera, © 2005 The McGraw-Hill Companies, Inc.



Spanglish: The Making of a New American Language, Ilan Stavans, © 2003, HarperCollins Publishers



Cover illustration copyright © 2003 by Joe Cepeda from Get Ready for Gabi! A Crazy Mixed-Up Spanglish Day by Marisa Montes. Reprinted by permission of Scholastic Inc.

スパングリッシュに関する多くの本のうちの3冊。「Learning Construction Spanglish」は、ますます多様化する建設現場の労働者たちのコミュニケーション促進を図る。イラン・スタバンス著「Spanglish: The Making of a New American Language」は、スパングリッシュという現象を説明する。「Get Ready for Gabi! A Crazy Mixed-Up Spanglish Day」は、子どものための本である

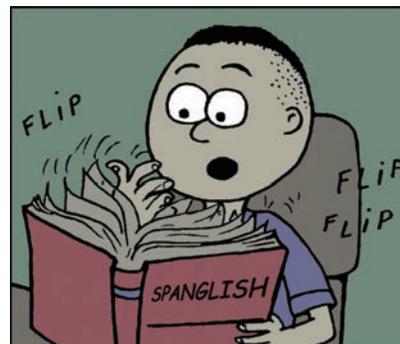
筆者は、米国においてスペイン語と英語が融合してハイブリッド言語となり、口語だけでなく書き言葉としても使われる機会が増えるようになった経過とその理由を説明する。イラン・スタバンスは、マサチューセッツ州アマースト市にあるアマースト大学の中南米・中南米文化ルイス・シプリング記念教授。著書に、「Spanglish: The Making of a New American Language」(ハーパーコリンズ社)、「Lengua Fresca」(ヒュートン・ミフリン社)などがある。

米国におけるラテン系の人口は、2005年の米国国勢調査局のデータによると、およそ4300万人強に増加し、独自のアイデンティティを形成しつつあり、重要な転機を迎えている。そうしたアイデンティティを最も純化した形で表しているのが、スペイン語と英語の混じったスパングリッシュである。スパングリッシュは、町で、学校で、政治の場で、教会で、そしてもちろんラジオ、テレビ、インターネットで広く使われている。

歴史的には、スパングリッシュのルーツは、イベリアの文明がフロリダとアメリカ南西部に足跡を残した米国植民地時代にさかのぼる。1848年にメキシコがその領土の3分の2近く(コロラド、アリゾナ、ニューメキシコ、カリフォルニア、ユタ)を隣国に売却するまで、スペイン語はビジネスと教育の言語であり、原住民の言語との交流があった。アング

ロサクソン人の到来と共に、スペイン語と英語の合成が始まった。このプロセスは、19世紀末のアメリカ・スペイン戦争の勃発とともに強化され、カリブ海地域に、米国人と共に英語がもたらされた。

スパングリッシュは、スペインのカタロニア地方からアルゼンチンのパンパスまで、スペイン語圏の各地で聞かれるが、スパングリッシュが最も発展したのは米国内である。スパングリッシュは田舎でも使われているが、その影響が最も強く見られるのは、カリフォルニア州ロサンゼルス市、テキサス州サンアントニオおよびヒューストンの両市、イリノイ州シカゴ市、フロリダ州マイアミ市、そしてニューヨーク市など、



スペイン語と英語の混じったスパングリッシュの理解は難しいこともある

ヒスパニック系移民が住みついた大都市圏である。スパングリッシュには、チカノ(メキシコ系)、キューバ系、プエルトリコ系、ドミニカ系などさまざまな種類がある。また地域によ

BALDO

BY HECTOR CANTÚ AND CARLOS CASTELLANOS



Reprinted with permission.

毎日全米約 200 紙に掲載されている漫画「バルド」。米国に住むプエルトリコ系のティーンエージャー、バルド君が、米国の主流文化とプエルトリコの伝統の間で生きていく様子を描いている。彼の世界には、勤め先の店の名前「Auto y Rod, Inc.」が象徴するように、2つの文化の融合があふれている。

でも世代によっても使い方が異なる。例えば、メキシコに近いテキサス州エルパソ市に来たばかりのメキシコ系移民の言葉は、米国北東部ニュージャージー州に住むコロンビア系米国人2世とは異なるはずである。

概して、スパングリッシュを話す人たちは皆、いずれかの時点で次の3つの手法を採用する。まず、ひとつの文章の中でスペイン語と英語を交互に使うコード切り替え、次に同時通訳、そしてオックスフォード英語大辞典にもスペイン語辞典にも載っていない造語の作成（例えば「Watch out! (気をつけろ!）」という意味の「Wáchale!」、 「roof (屋根)」を意味する「rufo」) である。

世界各地には、フラングレ（フランス語と英語の混成語）、ポルトゥニョール（スペイン語とポルトガル語の混成語）、ヒブリヤ（ヘブライ語とアラビア語の混成語）など、数々の国境言語がある。こうした言語については、当然のことながら賛否両論がある。どちらともつかない中途半端な言語であるとの批判もあれば、その創造性を賞賛する意見もある。スパングリッシュも論争の対象となっている。スパングリッシュは、ラテン系移民が過去の移民と異なり、米国の文化に溶け込もうとしないということの証明である、との批判がある。しかし私の見方は違う。ラテン系はすでに米国で最大の少数民族グループである。彼らの移民のパターンは他の移民グループとは異なる。ひとつには、彼らの出身国はすぐ隣国である。また、一定の期間に移民の大半が米国にやってきた他のグループと異なり、ラテン系の移民は絶え間なく入国している。そして、現在アメリカ合衆国となっている領土の大きな部分は、何世紀にもわたってスペイン語圏であった。

加えて、1980年代に連邦政府の資金援助を受けて全国に広がった2カ国語教育の影響を考慮する必要がある。2カ国語教育を受けたヒスパニック系の子供たちは、たとえわずかなものであるとしても、スペイン語と英語の両方とつながりを持っている。スペイン語が他の移民の言語のように消失

しなかったのは、これらの要因が積み重なったためである。むしろ、スペイン語は米国内で勢いを増している。しかし、それは純粋なスペイン語ではなく、新たな課題に適応して常に変動している。

私は、過去10年間にわたって、スパングリッシュの言葉を記録してきた。そして、この現象に深い関心を抱くように



© AP Images/Charlie Riecke

バイリンガルの授業を受けるカンザス州の6歳児



Courtesy <http://www.thereseat.com>

大リーグの野球チーム、ボストン・レッドソックスのファンは、スبانグリッシュも含むさまざまな言語でチームを応援する

なった。2003年に、私は約6000語の語彙集を出版し、セルバンテスの「ドン・キホーテ」の第1章をスبانグリッシュに翻訳した。その後も翻訳を続け、現在この小説を半分訳し終えたところである。

スبانグリッシュは、さまざまな関心の対象となっている。スبانグリッシュとは方言なのか。クレオール語と比較されるべきなのか。黒人英語との類似性は？ 明確な構文を持つ自立した言語となり得るのか。こうした問いに対して、言語学者の回答はさまざまである。私は、個人的には、この最後の問いに対して、数巻から成るイディッシュ語の歴史を書いた言語学者マックス・バインライヒの言葉を引用したい。彼は、言語と方言の違いは、言語には陸軍と海軍の後ろ盾が付いている点である、と述べている。私はまた、過去20年ほどの間に、スبانグリッシュで文章を書こうとする動きが多く、多くの集団で見られるようになってきている点を指摘したい。これは、その伝達手段が、口語のレベルだけに限定されなくなったことを意味するものだからである。すでに、スبانグリッシュによる小説、物語、詩、そして映画、歌、および無数の

インターネット・サイトが存在する。

私の生徒の一人は、笑いながら、スبانグリッシュは「la lengua loca (変な言語)」だと言った。

この記事に述べられている意見は、必ずしも米国政府の見解あるいは政策を反映するものではない。

アラビア語から英語へ

アラン・ピム = スミス



Courtesy Robin L. Yeager

「モスク」という言葉はアラビア語から来たものであるが、今日では、モスクの建物自体と同様、アラブ諸国以外の多くの土地に広がっている。トルコのイスタンブールにある美しいブルーモスク（写真）もそのひとつである

英語には、アラビア語を語源とする単語が多い。筆者は、そのような技術用語、一般用語のルーツをさかのぼる。アラン・ピム = スミスは、長年にわたってサウジアラビアおよび湾岸諸国で教師とジャーナリストを務めたフリーランス・ライター。トルコ在住。

あなたは、アラビア語を語源とする英語の単語をいくつ挙げられるだろうか。その数はかなり多いと思われる。例えば「mosque（モスク）」「minaret（ミナレット）」「bedouin（ベドウィン）」「sheik（シーク、シャイフ）」「caliph（カリフ）」「sultan（サルタン）」などはそのごく一部である。これらは、アラブ世界の物や人を表す言葉であるため、アラビア語を知らない人でも、語源はアラビア語ではないかと推測できる。「camel（キャメル - ラクダ）」「wadi（ワジ - 雨期以外は水のない川）」「dhow（ダウ - ダウ船）」なども同様である。

英語で使われているアラビア語の単語は、元のアラビア語とまったく同じであるものもあれば、発音・意味共に違っているものもある。「モスク」は、アラビア語の「masjid（マスジッド）」とはかなり発音が異なる。また、英語では「ベドウィン」を単数形でも使うが、その語源は、「bedawi」の複数形「bidwan」である。「ダウ」の語源は「dawa」であ

るが、これは今ではあまり使われない言葉であるため、アラビア語を母国語とする人たちに聞いても、知らないことが多い。

以上に挙げた例は、いずれもアラブあるいはイスラム世界の生活に結び付いた言葉であるため、英語にアラビア語のまま取り入れられていても不思議ではない。しかし、私たちの暮らしに浸透している果物や野菜などが、その名称も含め、もともとは異国から来たものであることは、多くの人たちにとって意外なことかもしれない。果物の「apricot（アプリコット - アンズ）」「orange（オレンジ）」「lemon（レモン）」「lime（ライム）」、そして野菜の「artichoke（アーティチョーク）」「spinach（スピナッチ - ホウレンソウ）」「aubergine（オーバージーン - ナス）」は、いずれもアラビア語に由来する名前を持つが、今ではその名前にも味にも異国情緒はない。例えば「レモン」は、中期フランス語から中世の英語に入ってきた言葉であり、さらにその語源は中期ラテン語である。そして、アラビア語の「laymun」とほとんど発音が変わっていない。一方、「artichoke」は、アラビア語の「al-khurshuf」からイタリア語を経由して英語に入ってきた言葉であるが、ほとんど認識できないほど変形している。

英語にはアラビア語を語源とする外来語が多いが、アラビ



© AP Images/Karel Prinsloo

「Dhow - ダウ船」の語源は、アラビア語の「dawa」である

ア語から直接入ってきたものは少ない。多くは、フランス語、スペイン語、イタリア語、またはラテン語を介して入ってきたものである。過去 1000 年間、英語は外国の言葉をどん欲に取り入れてきた。現在、近代英語の語彙のおよそ半数が、フランス語またはラテン語を語源とするものである。1066 年のノルマン征服以降、少なくとも 300 年にわたって、英国の法廷、貴族社会、および議会では、フランス語が使われ、その後も 1731 年まではフランス語が英国の法律の公用語であった。

従って、中世には、主にフランス語を介してアラビア語が英語に入ってきた。そして、おそらく、それらの言葉の最大の特徴は、その大半が、数学、天文学、および化学の各分野の専門用語だったことである。「alchemy (アルケミー - 錬金術)」という言葉は、1300 年代に英語に入ってきたものであるが、アラビア語の「al-kimya (アルキミヤ)」(その語源はギリシャ語)とほとんど変わっていない。「Alkali (アルカリ)」「algorithm (アルゴリズム)」「alembic (アレンビック - 蒸留器)」「almanac (アルマナック - 年鑑)」なども、ほぼ同時期に英語に入ってきた。「Al-」という音節は、アラビア語の定冠詞「al」(英語の「the」に当たる)から来たものである。例えば「alkali」は「al-qili」(the ashes of the saltwort plant - 塩生植物の灰)を語源とする。また、昔蒸

留に使われていた器具である「alembic」の語源は、「al-inbiq」(the still - 蒸留室)である。

アラブ・イスラム文明は、中世に最盛期を迎え、500 年間にわたって、アラビア語が学問、文化、そして知性の進歩のための言語となっていた。9 世紀には、古典ギリシャの科学・哲学論文がアラビア語に翻訳された。これを基盤として、アラブ諸国の学者、科学者、医師、数学者らは、学問を大きく発展させ、その成果が、スペインの各大学を通じて西ヨーロッパに伝えられた。例えば、インドで生まれた「ゼロ」の概念に基づく十進法を開発したのはアラブの数学者である。「Zero」という言葉は、同義語である「cipher」と同様、アラビア語で「空 (から)」という意味の「sifr」を語源とする。

中世の英国では、11 世紀から 13 世紀にかけて、そしてさらにその後も、アラビア語が広く学習されていた。1100 年代初めに、当時ヨーロッパ有数の学者だったバスのアベラードは、アルクワリズミの星座表をアラビア語からラテン語に翻訳した。今広く使われている数学术語のうち「algebra (アルジェブラ - 代数)」と「algorithm (アルゴリズム)」の 2 つは、このようにして英語に入ってきた。「algorithm」は、アルクワリズミの名前「al-Khwarizmi」を語源とし、「algebra」の語源は、「分割された各部分を再び統合する」という意味の「al-jabr」である。後者は、アルクワリズミの数学論文の

ひとつの表題「Hisab al-Jabr w'al-Muqabala」にも含まれている。面白いことに、アラビア語の「al-jabr」も、英語の「algebra」も、「骨折の外科治療法あるいは接骨」という意味をも持つ。オックスフォード英語辞典では、言葉の歴史的用法に基づいて定義を記しているが、この辞典では、「algebra」の最初の定義が、「骨折の外科治療法」であり、1565年の次のような文章を引用している。「このAlgebraというアラビア語の言葉は、骨折、そして時にはその治療を意味する」

アラブ諸国の学者が知識の拡大に貢献した最大の功績のひとつは、天文学の発展であった。現代の星図を見ると、アルタイル、アルデバラン、ベテルギウス、ベガ、リゲル、アルゴールをはじめ、星の名前の多くがアラビア語から来ていることがわかる。

特にアルゴール「Algol」の由来は興味深い。その語源は、アラビア語で「悪魔」を意味する「al-ghul」で、ここから英語の「ghoul（悪霊）」および形容詞の「ghoulish」も派生

している。食連星であるアルゴールは、もやがかかったように見え、2日ごとに明るさが変わるといふ幽霊のような外観から、この名前が付いた。星の名前だけでなく「zenith（天頂）」「nadir（天底）」「azimuth（方位角）」など多くの天文用語が、アラビア語を語源としている。

「talisman（魔よけ）」と「elixir（万能薬）」という言葉は、アラビアの錬金術から発生したものであり、「almanac（年鑑）」はアラビア語の天文用語「al-manakh」が語源である。アラビア語から来た技術用語には、このほかにも「caliper（カリパス）」「caliber（内径）」「aniline（アニリン）」「marcasite（白鉄鉱）」「camphor（カンフル）」などがある。宝石の重さの単位「carat（カラット）」や紙の量の単位「ream（リーム）」も、語源はアラビア語である（「Girat（重量の単位）」「rizmah（ペールまたは束）」）。この分野では、このほかにも「average（平均）」と「alcohol（アルコール）」という2つの言葉の語源が興味深い。数学の概念として広く使われている「average」は、「破損品」という意味のアラビア語「awariya」を語源とするが、これは、海上輸送中に破損した商品の損失額を、通商当事者の間で平均して負担しなければならなかったこと

による。

「Alcohol」の語源は、「al-kohl（中東で薬効のあるアイシャドーとして使われる黒い微粉末）」である。黒い粉末と、私たちの使っているアルコールにどのような関係があるのか、一見わかりにくいのが、この粉末（通常は硫化アンチモン）を物質のエキスあるいは純粋な蒸留物と考えれば、つながりの

あることがわかる。19世紀末になっても、詩人のサミュエル・コールリッジが、シェークスピアに関するエッセーの中で、悪人イ

アーゴを形容して「the very alcohol of egotism（利己主義のかたまり）」という表現を使っている。

中世に英語に入ってきたアラビア語の科学・技術用語が非常に多いことは、当時、科学・技術分野の業績においてアラブ・イスラム文明が全般に他より優れていたことを物語っている。また、その次にアラビア語からの外来語の多いのが、ぜいたく品に関連する言葉であることは、



© AP Images/
Seth Wengig

© AP Images

多くの香辛料や布地の名前、そして「coffee（コーヒー）」という言葉は、アラビア語を語源とする

アラブ・イスラム文明の生活水準の高さを表すものである。

エリザベス1世（1533～1603年）の時代までには、英国の商船隊が、ヨーロッパ以外の世界を発見し、中東や、さらに遠い地域から、ぜいたくな異国情緒の物品、原料、習慣を持ち帰るようになっていた。この時代に旅行者が持ち帰ったアラビア語の言葉は、優雅でぜいたくな生活様式を物語るものが多い。「Sugar（砂糖）」「syrup（シロップ）」「julep（ジュレップ）」「sherbet（シャーベット）」「marzipan（マジパン）」などは皆、アラビア語を語源とするが、いずれもエリザベス時代の主婦の買物リストに登場するようなものではなかった。「Coffee（コーヒー）」の語源はアラビア語の「gahwah」（発祥はイエメン）、「mocha（モカ）」の語源は、イエメンの港湾都市の名前である。そして、香辛料の「caraway（キャラウェイ）」「saffron（サフラン）」「cumin（クミン）」も、皆アラビア語を語源としている。

「Sash（サッシュ）」「shawl（ショール）」「sequin（スパンコール）」「muslin（モスリン）」「mohair（モヘア）」「damask（ダマスク）」「cotton（コットン）」といった異国の高級品の名称も、豊かな生活をほうふつとさせる。「Mus-



© AP Images/Gustavo Ferrari

のひら」という意味のアラビア語「raha」を語源としている。

アラブ人は常に船旅と貿易を盛んに行っていたため、アラビア語からの外来語にこれらの分野の言葉が多いのも当然である。船員用語の「mizzen mast（後檣）」は、「マスト」という意味のアラビア語「mazzan」から来ている。少し変わったところでは、「admiral（提督）」の語源は、「海の王



© AP Images

「camel（ラクダ）」「saffron（サフラン、クロッカスの花）」「jar（かめ）」という言葉はいずれもアラビア語を語源とする

lin」は、イラクの町の名「Mosul（モスル）」、「sash」は、モスリンを意味するアラビア語「shash」が語源である。生地の名前「damask」の語源は、「Damascus（ダマスカス）」である。英語の「tabby（タビー - トラ猫）」も、元をたどれば、バグダッドの「al-Tabiyya（アルタビヤ）」地区で作られた縞柄の絹タフタ地から来ている。そして、「sequin」の語源は、「貨幣鑄造に使う金型」という意味のアラビア語「sikkah」である。

安楽な生活を想像させる「sofa（ソファ）」「alcove（アルコーブ）」「jar（かめ）」「carafe（カラフ）」という言葉も、皆アラビア語からの外来語である。「Sofa」は「suffah（長いす）」、「alcove」は「al-qubbah（アーチ）」、「jar」は「jarrah（陶製の水がめ）」、「carafe」は「gharrafah（ビン）」である。また、アラビア語から来た色の名前、「crimson（深紅色）」「carmine（洋紅色）」「azure（紺碧）」「lilac（薄紫色）」なども、私たちの語彙を豊かなものにしている。そして、レジャーの分野でも、テニスなどで使う「racket（ラケット）」は、「手



Courtesy Robin L. Yeager

子」を意味する「amir al-bahr」の短縮形「amir al-」である。「Arsenal（武器庫）」の語源は、「製造所」または「作業所」を意味する「dar as-sina'ah」、そしてさらにさかのほれば、「芸術、技術、技能」という意味の「sina'ah」である。また「magazine（弾倉、火薬庫）」は、「倉庫」という意味の「makhzan」からの外来語である。貿易の分野では「tariff（関税）」がアラビア語を語源とする。

そのほかにも、「adobe（アドビ）」「crocus（クロッカス）」「genie（ジニー - 精霊）」「popinjay（ポピンジェイ - シャレ者）」など、大なり小なり不明瞭化しているもののアラビア語を語源とする面白い言葉がたくさんある。「Garble（ガブル - 不明瞭化する）」という言葉自体が、「ふるいにかける、選別する」という意味のアラビア語「gharbala」から来てい

る。これは、もともと香辛料を売るときにふるいにかけることを指した言葉で、後に「混ぜる、混乱させる」という意味に変わった。しかし、不明瞭になっているかどうかにかかわらず、アラビア語を語源とする語彙は、英語を非常に豊かな言語にしている。

この記事に述べられている意見は、必ずしも米国政府の見解あるいは政策を反映するものではない。

この記事は、「Saudi Aramco World」2007年3・4月号から許可を得て転載したものである。

<http://www.saudiaramcoworld.com/issue/200702/from.arabic.to.english.htm>

馬の世界のアラビア語

ゲーリー・ポール・ナブハン

馬、馬術家、そして馬具に関するアラビア語の言葉が、地球の裏側の米国南西部の砂漠で、新たに根を下ろしている。これらの言葉は、まずアラビア語からスペイン語に取り入れられ、スペイン語がアングロサクソンの伝統と交わるとともに、米国英語に入ってきた。

8世紀初頭に、アラブ諸国のイスラム軍と北アフリカのベルベル人が、イベリア半島の大部分を征服した。その南部の、アラブ人がアル・アンダルスと呼んだ地域では、アッバース家に倒されたシリアのオーマヤド王朝の王子が、750年ごろ王朝を築き、文明を繁栄させた。そして1492年に、2つの重要な出来事があった。新世界が発見され、スペインとポルトガルの植民活動にとって、新たな半球が開かれたこと、そしてスペインに深く永久的な文化の足跡を残したイスラム教徒とユダヤ人が、最終的にスペインから追放されたことである。

新世界に植民地を築いたスペイン人の中には、アラブ人やベルベル人の難民も含まれていた。彼らは新世界に馬も連れていき、それに伴い、アラビア語を語源とする馬に関連する用語が、米国とメキシコの国境沿いの砂漠で使われる英語とメキシコ系スペイン語の方言である「カウボーイ用語」に、深く根を下ろすようになった。

私は、1975年に、米国とメキシコの国境地帯の広大な牧場地帯に移住し、こうしたカウボーイ用語に触れるようになった。現在、妻と私は、馬、羊、七面鳥を飼っており、カウボーイ、牧場主、大型動物専門の獣医といっ



アラビア馬に乗る前の少女

た人たちと頻繁に接触するが、彼らは皆、今から4世紀半も前にこの地域に入ってきた、アラビア語を語源とする言葉を、私の子どもたちがコンピューター用語を使うように、事もなげに使っている。

例えば、彼らは、非常に乗馬技術に優れた人を、素晴らしい「jinete (騎手)」と呼ぶ。これは、かつて北アフリカで戦場用に発達した、流れるような乗馬技術を指す言葉だったが、今では騎手そのものを指す。語源は、ソノラ砂漠地方のスペイン語の「xinete」、そしてさらにさかのぼれば、現在のアルジェリアの部族名「Zanatah」から発したアンダルシア語の「zanati」である。

ソノラのカウボーイや騎手たちは、今も鞍のことを「albardón」と呼ぶことがあるが、これはイベリア語の「albarda」から来ており、「albarda」は現在で

は「荷鞍」という意味で、アラビア語の「al-barda'a」を語源とする。そのほか、彼らが「acion」と呼ぶ皮製のベルト、「azote」というムチ、「argollas」という金属製の輪も、それぞれ語源はアラビア語の「as-siyur」「as-sut」「allgulla」である。アラビア語を語源とする馬具用語で、私が最も気に入っているのは、「おもがい」または「端綱」という意味で広く使われている「hackamore」という言葉である。これは、アンダルシア語の「jaquima」を直接取り入れたもので、その語源は、アラビア語で、頭に付けるものを表す「sakima」である。

動物の毛色を表す言葉にも、アラビア語を語源とするものが多い。私は色覚障害があるため、カウボーイたち

© AP Images/Eric Draper

が馬や牛や羊の毛色を表すために使う言葉にあまり耳を傾けずにいたが、それでも「almagre」が赤褐色の種馬であること、そしてその語源が、アラビア語で「赤い土」という意味の「al-magra」であることは知っている。

しかし、毛色を表す言葉の中で、最も不可解だったのは、栗毛の馬（鼻先から尻尾までさび茶色の馬）を女性の名前である「Alice-Ann（アリス・アン）」と呼ぶことであった。かなり時がたってから、それがスペイン語の「alazan」、そしてさらにはアラビア語の「al-azan（赤っぽい木の種類）」を語源としていることを知った。最近、私は、ジャックという男性による、「アリス・アン」の二重の意味を取り入れた次のようなリメリック（こっけい5行詩）を読んだ。

On the frontier a cowboy's best gal
Was called Alice Ann, and not Sal.
The trick is, of course,
That this friend was a horse
So an Alice could be a male pal.

フロンティアでは、カウボーイのいちばんの友だちはサル（男性の名前）ではなくアリス・アン。でも、この友だちは馬だから、アリスはアリスでも男かもしれない

ゲーリー・ポール・ナブハンには、地域社会と地元の食物の共進化を取り上げた「Why Some Like It Hot」（アイランド・プレス社、2004年）、アリゾナ大学出版局から出版予定のエッセー集「What Flows Between Dry Worlds: Culture, Agriculture and Cuisine in Arabian and American Deserts」など、著書20冊がある。

この記事に述べられている意見は、必ずしも米国政府の見解あるいは政策を反映するものではない。

この記事は、「Saudi Aramco World」2007年3・4月号36～38ページに掲載された。



ワイオミング州で牛を追う典型的な米国のカウボーイ

©AP Images/jasper Ingalls

参考資料

書籍

Berger, Harris M. and Michael T. Carroll, eds. *Global Pop, Local Language*. Jackson: University Press of Mississippi, 2003.

Ostler, Rosemarie. *Dewdroppers, Waldos, and Slackers: A Decade-by-Decade Guide to the Vanishing Vocabulary of the Twentieth Century*. Oxford : New York: Oxford University Press, 2003.

Pennycook, Alastair. *Global Englishes and Transcultural Flows*. New York: Routledge, 2006.

Stenström, Anna-Brita, Gisle Andersen, and Ingrid Kristine Hasund. *Trends in Teenage Talk: Corpus Compilation, Analysis, and Findings*. Amsterdam : Philadelphia, PA: J. Benjamins, 2002.

ウェブサイト

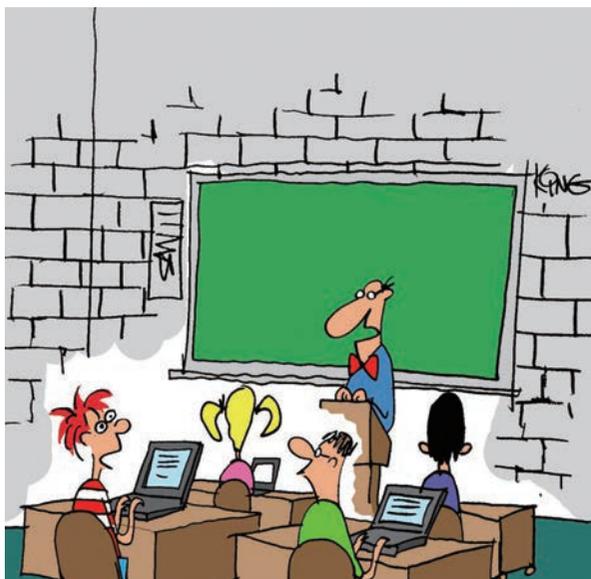
U.S. Department of State
Bureau of Educational and Cultural Affairs
English Teaching Forum
<http://americanenglish.state.gov/english-teaching-forum>

Do You Speak American?
Public Broadcasting Service
<http://www.pbs.org/speak/>

English Daily
<http://www.englishdaily626.com/>

Urban Dictionary
<http://www.urbandictionary.com/>

米国国務省は、上記資料の内容・入手可能性について一切の責任を負わない。インターネットリンクは2014年8月現在、すべて有効であった。



<http://www.jerryking.com> and <http://fno.org>

「紙と鉛筆でノートを取っていた時代には、みんな退屈な授業の間どうしていたんだろう。今はIMをしていてもノートを取っているふりができる」

ノートパソコンを使う授業は、教師にとっては新たな難題、そして生徒にとっては授業をさぼる新たな機会を提供する

米国大使館 広報・文化交流部
アメリカンセンターJapan
アメリカンセンター・レファレンス資料室

札幌アメリカンセンター・レファレンス資料室
〒064-0821 札幌市中央区北1条西28丁目 米国総領事館内
Tel: 011-641-3444

アメリカンセンターJapan
〒107-0052 東京都港区赤坂1-1-14 NOF溜池ビル8階
Tel: 03-5545-7431

関西アメリカンセンター・レファレンス資料室
〒530-8543 大阪市北区西天満2-11-5 米国総領事館ビル7階
Tel: 06-6315-5970

福岡アメリカン・センター・レファレンス資料室
〒810-0001 福岡市中央区天神2-2-67 ソラリア・パークサイドビル8階
Tel: 092-733-0246

在沖縄米国総領事館・広報文化課レファレンス資料室
〒901-2104 沖縄県浦添市当山2-1-1
お問い合わせはオンライン質問箱をご利用ください
<http://go.usa.gov/TCsP>

米国大使館のウェブサイト

米国大使館 <http://japanese.japan.usembassy.gov/>
アメリカンセンターJapan <http://AmericanCenterJapan.com/>
レファレンス資料室 <http://usinfo.jp/>